

麦の生育期間中の栽培管理

1. 病害虫防除

①赤かび病

・感染すると穂の一部あるいは全部が枯れたり、褐色になったりします。罹病した穂の穀粒はカビにより赤く着色します。

・赤かび病の原因となるカビは人体に対して有害な毒素を作ります。

・したがって農産物検査法では赤かび粒が0.0%(1万粒に5粒以上)を超えて混入してはならないとされています。

[対策]

・多量追肥は避けます。

・防除適期は開花期からほぼ10日間になります。

・薬剤はその間に2回防除します。

(1回目:開花期、2回目:1週間~10日後)



②さび病(赤さび病、黄さび病)

・主に葉身に生育全期間を通じて発病します。

・冬が暖かで雨が多かったり、多窒素で春先に麦がよく繁茂した年には、早くから発生し被害も大きい。

・窒素質肥料の偏用を避け、リン酸、カリを十分に施用します。

③黒穂病(なまぐさ黒穂病、堅黒穂病)

・出穂、開花中に穂が感染します。

・防除は種子消毒を行います。

④ムギアカタマバエ(コムギ)

・幼虫が子実の養分を吸収します。被害粒は肥大しなくなります。

・多発圃場の条件は、風当たりが弱く、冬季は日当たりが良く、あまり乾燥しない地勢環境とされています。

2. 追肥

・追肥の窒素質肥料は生育状況を見て加減しましょう。また、被覆肥料(LP30 など) を基肥施用している場合は追肥をする必要がありません。

・大麦「おうみゆたか」については、タンパク含量が低いことが問題とされています。そこで幼穂長10mmの時期に窒素を追肥すると収量・品質が向上します。

[小麦](成分量 kg/10a)

[大麦](成分量 kg/10a)

	1月下旬～ 2月上旬	3月中旬
窒素	3	1～2
リン酸	0	0
加里	4	0

	1月下旬～ 2月上旬	3月上旬～ 3月下旬
窒素	2～3	2～3
リン酸	0	0
加里	2～3	2～3

3. 麦踏み

早播きや暖冬などで冬の間麦の生育が進みすぎ茎立ちが早まると、春先の低温により幼穂が被害を受けることがあります。生育が進みすぎた場合、麦踏みによって生育を抑制することができます。

・1月上旬～2月下旬の節間伸長(茎立ち)が始まる前に行います。あまり遅れてから行くと幼穂を傷めます。

・土壌水分が多い場合には湿害を助長するので、よく圃場が乾燥した状態で行うようにしてください。

[\(戻る\)](#)